マタイ 8:14-17「人の求め、神の求め」

「イエスはペトロの家に行き、そのしゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。イエスがその手に触れられると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした。夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。『彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った』」

主イエスが行かれるところ、どこででも、求めを持った人々がおります。切実な求めを持った人々であります。病に苦しみ、生活に苦しみ、精神的に苦しんでいる人々であります。

ここに人の求めがあります。救われたいという人の求めであります。

それに対して、神の求めがあります。人に救われてほしいと願う、人を救おうとする、神の求めであります。

この人の求め。救われたいという人の求め。この神の求め。人を救おうとする神の求め。この人の求めと、この神の求めとが合致するときに、そこに「救いのみわざ」が立ち起こってまいります。わたしたちの今日の聖書の箇所におきましては、ペトロのしゅうとめが癒される、悪霊に取りつかれた大勢の人々が解放される、病気を癒される、という救いのみわざが起きております。

人の求めと、神の求めとを、どのように合致させることができるのでありましょうか。人の求めと、神の求めとが合致するとき、そこに「救いのみわざ」が立ち起こってまいります。

主イエスが行かれるところ、どこででも、求めを持った人々がおります。人々は、救われることを求めております。そうしてまた神は、主イエスによって人々を救うことを、求めておられます。ですから、この人と、この神とが会いさえすれば、いつでもすぐ奇跡が起きるのでしょうか。

主イエスが、ご自分の出身された小さな村ナザレに行かれましたときに、そこに住んでる人々はみんな、救われたい、という求めを持っておりました。救われたくない人など、一人もいようはずがありません。そうしてまた主イエスご

自身も、ナザレの人たちをみんな救いたい、という求めを持っておられました。救われたい、という人々と、救おう、というイエス様。この人々と、この主イエスとが出会ったときに、奇跡が起きたんでしょうか。

起きなかったのです。聖書にこのように記されております。

「人々はイエスにつまずいた。イエスは、『預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである』と言い、人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」（マタイ 13:57-58）

人々は確かに、求めを持っておりました。病気の苦しみ、生活の苦しみ、精神的な苦しみから救われたいと、みんな願っておりました。そうしてまた、主イエスのほうでも、人々をみな一人残らず救いたいと願っておられました。このようにして、人の求めと、神の求めとが、そこにおいて、ほとんど合致しそうになっておりました。

ところが残念なことに、ナザレの村の人々は、どうしてもイエスに信頼を置くことができませんでした。確かに私は救われなければならない必要を抱えて苦しんでいるけれども、この私を救ってくれるのがイエスだとは、どうしても思えない。イエスなら知っている。小さい頃から知っている。あのイエスが鼻たれ小僧であったときから知っている。だが、イエスが何だと言うのだ。大工のせがれの若造に何ができると言うのだ。私が救われたいのはやまやまだが、イエスが私を救うとは思えない。私を救うのはイエスではない。イエスではありえない。

こうして、ここに、救われたいという人々がおり、ここに、人を救おうとする神が主イエスにおいていましたもう。にもかかわらず、人が救われるということが起きない。救われないのであります。

これは、人の求めが、神の求めに対して、信仰によって結びつけられるということが、欠如しているためであります。救われたいという人の求めがあり、救おうとする神の求めがあり、そこへ、信仰が欠如しているならば。すなわち、「主イエスよ、われを救いたまえ！」という信仰が欠如しているならば、人の求めと、神の求めは、ついに合致することなく、結びあわされることなく、それゆえ、「救いのみわざ」が立ち起こることなく、終わってしまう、ということであります。

わたしたちは、どうでありましょうか。もちろんわたしたちは、切実な求めを持っております。では神様は、どうでありましょうか。神様は、わたしたちを救おうと願っていたもう。わたしたちが救われるのが、神の求めであります。この人の求めと、この神の求めとは、信仰によって結びつけられるのでなければなりません。すなわち、イエスである。この私を救いたもうのはイエスである。イエスのみである。「主イエスよ、われを救いたまえ！」　この信仰をもって、人の求めと神の求めが結合せられるのでなければなりません。

第二番目に申し上げたいことは、この信仰は、次の信仰へと、進まなければならない、ということであります。それはパウロがローマの信徒への手紙で、「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」と言っているとおりであります。（ローマ 1:17 口語訳）

すなわち、人の求めというものがありまして、それは、病気から救われたい、生活の苦しみから救われたい、精神的な悩みから救われたい、という求めでありますけれども、それらの求めが表面的に充足されたならば、もうそれでおしまいなのだろうか。人の求めが表面的に満足せられたならば、もうそれで信仰は用が済むのだろうか。そうではない、ということであります。

いったいこの病気から救われたい、生活の苦しみから救われたい、精神的な悩みから救われたいという求めは、信仰の段階で言いますならば入口だということであります。

その入口の先に横たわっているのが、罪の問題であります。主イエスは、単に私たちの病気を癒し、生活の窮乏を満たし、精神の悩みを和らげる、というだけのためにいらっしゃったのではない。主イエスが来たりたもうたのは、ご自分の身に私たちの罪を担い取ってくださるためであります。すなわち聖書が「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」と言うとおりであります。

このイエスキリストは、あたかもスポンジのように、私たちの罪という罪をみな吸い取って、ご自分のうちに担い取ってくださり、そうして、それらを全部十字架につけてもって行って、取り除いてくださる救い主であります。

ここに、私たちを罪から救いたいと願っていたもう、神の求めがあります。しかも、イエスが身代わりに十字架で死ぬという方法でもって私たちを救いたいと願っていたもう、神の求めであります。

こういう神の求めがあるにもかかわらず、わたしたちの側において求めがない、ということが問題であります。神の求めがあるのに、人の求めがない。

すなわち、人の側においては、病気から救われたい、生活の苦しみから救われたい、精神的な悩みから救われたい、という求めはあるんだけれども、しかし、自分が罪から救われなければならん、とは思わない。いろいろの求めは確かにあるんだけれども、罪の赦しの必要については、それを別段感じないという、この深刻なる求めの欠如であります。

そうでありますならば、いくら神が救おうと思っても、人が救われることができない。神は主イエスキリストの身代わりの十字架でもって、人を救う手筈をすべて整えて、救おう、救おう、と待ち構えていたもうけれども、この私たちの胸中においては、いや別に罪を赦してもらわなきゃならんとは感じていない。罪からの救いを求めてなんかいない。こういう神の求めがあるにもかかわらず、人の求めが欠如してるという状態においては、二つが合致するなんてことは起こり得ない。

「ああ、イエス様、罪人の私をお救いください！」という人の求めが私たちの側にあって、はじめて、神の求めと人の求めが合致するんです。合致すると、「私は罪赦され、救われました、ハレルヤ！」となる。

ひるがえって私たちは、こういう求めを持っているだろうか。自分はどうしても罪から救われなければならない。自分は罪人であって、自分の罪をどうしても赦してもらわなければならない。こういう求めを持っているだろうか。こういう求めを持っていないんだったら、わたしたちは「ハレルヤ！　私は罪赦され救われました！」という単純な喜びの証しを、いつまでたっても持つことができない、という結果に終わってしまいます。

第三番目に申し上げたいことは、それでは、罪の赦しを経験したら、もうそれで信仰の役目は終わるのだろうか。病気は癒され、生活の必要は満たされ、精神の悩みは和らげられ、過去のあの罪もこの罪も全部赦していただいた、ハレルヤ！　これでもう信仰は、終わりなのだろうか。そうではない、ということ

であります。

信仰は、さらに信仰へと進んで行かなければなりません。私の病気は癒された、ハレルヤ！　私の生活の必要は満たされた、ハレルヤ！　私の心の悩みは和らげられた、ハレルヤ！　私の罪は赦された、ハレルヤ！　そこで終わりではありません。そこからさらに進むべき信仰というものがございます。

それがパウロの言うところの「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」の信仰であります。ガラテヤ 2:20 の信仰であります。私たちの信仰は、どうしてもここまで進んで行かなければならない。主につくものは主と一つの霊になるという、合一の経験であります。

この世界が「神の畑」であるとしますならば、神が福音の種を世界にまきたもうのは、こういう良い実を収穫なさりたいがためであります。すなわち、「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」と喜び証しする無数の人々を獲得することこそが、神の願いであり、神の求めであり、神の目的であります。主イエスがおいでになり、主イエスが十字架にかかり、主イエスが三日目に復活し、主イエスが天に昇り、主イエスが世の終わりに再び来たりたもうのは、ただ、このことのためだけであります。すなわち、「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」と喜び証しする人々を得ることであります。

だが、私たちはなかなか、この合一の経験へと至ることがむづかしい。それは、わたくしが死んでキリストが生きるという、自己を放棄する経験だからであります。いったい私たちの求めというのは、これはすべて、自己を握るところから来るところの求めでありまして、病気が癒されたいという切実な求めは、自己から、自分自身から来るものであります。生活の不足を満足されたいという求めは、自己から、自分自身から来るものであります。精神の悩みを和らげられたいという求めは、これもやはり自己から、自分自身から来るものであります。そうして、罪を赦してもらいたい、地獄ではなく天国に入れてもらいたいという求めもまた、つきつめるならばやっぱり自己から、自分自身から来るところの求めであります。

このように、私たち人の求めというのは、どこまで行っても、この自分というもの、自己というもの、自分自身というものから切っても切り離せるものではない。いや、ほとんど求めというものと自己、自分というものが、一体化して

いるのであります。

ところが、信仰が信仰へ、さらに信仰から信仰へと進んで行ったときの最後の目標は、どこかまで行くかと言うと、ついにはこの自己、自分を手放さなきゃならない、というところまで行くのであります。「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」というのは、自己を手放してこれをまったくキリストにおゆだねする、という経験にほかなりません。

そうしますと、信仰が信仰から信仰へと進んだ最終段階においては、わたしたちは、もう人の求めというものを、おゆだねするのでなければならない。わたしたちは、もう、あのこと、このことを求める、というのではなくして、わたしたちはもうただ神だけを求める。私は神を求めるのみである、というところまで行くのでなければならない。

わたしたちは、どうでありましょうか。「神の畑」に福音の種がまかれます。そうすると、すぐに芽が出てまいります。病気が救われたい、という願いの芽であります。生活の必要が満たされたい、という願いの芽であります。精神の悩みを和らげられたい、という願いの芽であります。それらの芽はさらに成長して、どうしても私の罪を赦してもらいたいという、罪の赦しを求める芽が成長してまいります。そこからさらに成長しますと、いよいよ豊かな実を結ぶようになってまいります。すなわち、「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」という喜びの証しの実を結ぶのであります。

だがイエス様はおっしゃった。そこまで行くのがむづかしい。イエス様はこういうたとえをしておられます。

「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いので、すぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい」(マタイ 13:3-9)

わたしたちはどうでありましょうか。わたしたちもまた、信仰から信仰へと進んで行かなくてはなりません。私たちは、病気の癒しを求めるべきであります。

私たちは、生活の必要が満たされるよう祈り求めるべきであります。私たちは、精神の悩みが和らげられるよう祈り求めるべきであります。私たちは、過去のあの罪もこの罪も、すべての罪がイエス様の身代わりの十字架によって赦されるよう祈り求めるべきであります。

しかし、そこで終わってしまったならば、わたしたちは、途中で茨が伸びてふさがれて実を結べないままに枯れてしまうという、そういう姿であります。わたしたちはさらに進んで、「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」の信仰まで進まなければなりません。

確かに、古い自分に死んで、キリストに新しい私を生きていただく。こういう信仰は、むずかしいものであります。古い自分に死ぬ、というようなことは、自分というものに固執している限りは、得られるものではありません。

だからこそ私たちは思い切って、「イエス様、私自身をまったくあなたに明け渡し、おささげしますから、あなたの御心のままになさってください」という祈りをするのでなければなりません。

お祈りいたしましょう。

祈り

天の父なる神様。あなたはこの世界という畑に、福音の種を蒔いてくださいました。そこから生え出て育って来ている芽が、わたしたちであります。
わたしたちは、さらに信仰から信仰へと成長したいと願っております。あなたが、この「神の畑」から収穫したいと願っておられるところのもの。それは、あの「生きているのはもう私ではない。キリストが私のうちに生きている」という喜びの証しを持って生きる無数の聖徒たちの出現であります。どうかわたしたちも、その信仰へと至ることができますように。
私たちの信仰は基本的には、私の求めをイエス様が満たしてくれるというふうに、信仰を手段として自分の求めの実現を願っていくものでありますけれども、信仰の最後のところにおいては、自分の求めを手放し、自分自身すらも手放し、ただ神様を求めるのでなければならなことを、理解させてください。私たちは今日一足飛びにそこまで行くことはできないとしても、どうか、そのような豊かな信仰の実を結ぶことができますように、私たちの霊的な成長をお導きくだ

さい。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン